歴史家クリストファー・ラッシュと社会批評
──知識人の「使命」と「社会批評としての歴史」──

千守　隆夫*

現代アメリカ社会・文化に対する辛辣な社会批評を様々な主題のもとに展開したクリストファー・ラッシュは，その生涯をとおして自らが歴史家であることにこだわり，自らの社会批評を批判的な歴史的記述として，いわば「社会批評としての歴史」として位置付けていた。その集大成的作品といえるのが「ポピュリズム」をめぐる考察を展開した『唯一の本当の天国』であった。こうした社会批評をめぐるラッシュのスタンスを規定することになったのが，彼の初期の代表作『アメリカにおけるニューラディカリズム』における，社会に対する批判的役割を「ディタッチメント」を維持することで果たすことをその「使命」とする知識人観である。ラッシュは，歴史と社会批評との相互依存的な関係性に着目し，「社会批評としての歴史」として社会批評を展開することでその「使命」を果たそうとしたのである。

キーワード：知識人，知識人の使命，社会批評としての歴史，過去の同時代性

目　次

はじめに
1．初期ラッシュにおける知識人論と知識人の「使命」
　1-1．知識人の「使命」と「ディタッチメント」
　1-2．「知識人のアンチ・インテレクチュアリズム」
　　―「コミットメント」と「離反」
　1-3．「超然とした関与」
2．歴史と社会批評
　2-1．精神分析から歴史的記述へ
　2-2．ラッシュとホフスタッター
　2-3．歴史と社会批評
3．「社会批評としての歴史」と『唯一の本当の天国』
　3-1．「過去の同時代性」と歴史家の「責務」
　3-2．『唯一の本当の天国』
　3-3．「社会批評としての歴史」
4．ラディカリズム再生に向けた歴史家の潜在的可能性
むすびにかえて

はじめに

アメリカの歴史学者クリストファー・ラッシュは，その約30年にわたる研究活動をとおして常に独自の視座から様々な批判的，知的イニシアティブを発揮しつづけ，それゆえ現代アメリカにおいて最も洞察力に富み，そして偶像破壊的な社会批評家のひとりとして位置付けられてきた人物である。ラッシュは，長年にわたる書評活動[1)]をとおして身につけた鋭い時代感覚

＊立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

を背景に，現代アメリカ社会の的確な観察者であるとともに辛辣な批評家でもあった。しかしながら同時に，彼は歴史家として常にアメリカの過去へと目を向けつづけることで，アメリカ社会・文化の過去に関する優れた解釈者であり，よき理解者でもあった。ラッシュがその晩年期に著した『唯一の本当の天国――進歩とその批判』(1991)[2]は，ラッシュの数多くの著作の中でももっともアメリカ的であると同時にもっとも歴史学的な作品である。彼の晩年期における，この著を中心とした「ポピュリズムの伝統」と彼が呼ぶアメリカ的な思想の伝統に関する考察は，この後者の，彼の歴史家としての側面に導かれたものである。

ラッシュは，かの有名な『ナルシシズムの文化――薄れゆく期待の時代におけるアメリカン・ライフ』(1979)[3]を出版した翌年，1980年のインタビューの冒頭で「あなたは非常に広範な主題について書いていますが，ご自分のことをどのようにみてらっしゃいますか？歴史家，社会批評家，大きな意味での哲学者，それとも著述家ですか？」と質問されたとき，「私は学業を積んだ一人の歴史学者であり，いわゆる文化的歴史家とでも考えていただければいいと思う」と答えている[4]。『ナルシシズムの文化』をはじめとするラッシュの社会批評的著作のインパクトは非常に大きく，ラッシュの「ナルシシズム」論を目の当たりにした他の歴史家たちからは，「ラッシュは社会批評家かもしくはジャーナリズムに鞍替えした」と決め付けられる向きもあった[5]。しかし，ラッシュはいつもそのコアにおいて歴史家であり，その着想はいつも歴史家のそれであった。ラッシュの社会批評的著作はこれらと決して断絶したものではない。つまり，彼は自らの歴史的研究だけでなく，その延長線上にある社会批評的著作もまた歴史的企図としてみなしていた。彼の社会批評は，歴史の中に位置付けられる「いま」に対する批評，いわば「社会批評としての歴史（history as social criticism)」であったのである。

本稿は，こうした社会批評をめぐるラッシュのスタンスについて明らかにしようとするものである。日本においては，『ナルシシズムの文化』を中心とする「ナルシシズム」論が展開されていた時期こそが，思想家としてラッシュが最も輝いていた時期という評価が一般的である。しかし，アメリカ・ラディカリズムの再生というラッシュの研究生活全般をとおして通底する中心的課題に真正面から取り組み，社会批評をめぐる自らのスタンス，つまり「社会批評としての歴史」というスタンスを鮮明に打ち出すようになったのは，晩年の「ポピュリズム」をめぐる考察においてである。それゆえ，ラッシュの社会批評をめぐるスタンスについて明らかにすることは，これまであまり論じられることがなく等閑視されてきた晩年のラッシュ思想の意味をより深く理解する上で助けとなるような重要な視座を提供しうると考えている。

以下本稿では，まず第一に，ラッシュの初期の知識人論についてみておく。初期の知識人論，とりわけそこにおける知識人の「使命」に関するラッシュの考察は，その後の社会批評をめぐる彼のスタンスを大きく規定することとなった。第１章では，その点について，「ディタッチメント」というキー概念に焦点を当てつつ論じたい。そして第二に，自らを歴史家とみなしていたラッシュが，歴史と社会批評との関係をどのように捉えていたかについて考察する。ラッシュは，歴史と社会批評との間における潜在的な相互依存的関係性について着目し，自らの

企図を批判的歴史的記述として展開することで知識人の「使命」を果たそうとした。その点について第2章において論じたい。そして第三に，批判的歴史的記述，つまり「社会批評としての歴史」という彼の企図におけるその方法論的思想について見ておく。その点について，「社会批評としての歴史」の集大成的作品ともいえる『唯一の本当の天国』の議論と関わらせつつ第３章において論じたい。そして最後に，アメリカ・ラディカリズムの再生という具体的な課題に取り組む上で果たしうる歴史家の知識人的役割についてラッシュがどのように考えていたかについて第４章において論じることとする。

１．初期ラッシュにおける知識人論と知識人の「使命」

ラッシュは歴史学者としてアイオワ大学やロチェスター大学といった教育機関で職を得て，教鞭をとりつづけたが，その一方で純粋な意味での歴史的研究にとどまらず，歴史家として社会批評を展開することに重きをおき，独自な視点から辛辣な社会批評を展開した。彼の多くの社会批評的著作において，その核となっているのは主にアメリカ知識人に関する批判的な歴史的考察なのであるが，ラッシュのそうした知識人批判の根底には初期に形成されたラッシュ独自の知識人観が大きく横たわっている。本章では，まずこのラッシュ初期の知識人観，そしてそこからでた知識人の「使命」に関する彼の見解についてみていこう。

1-1．知識人の「使命」と「ディタッチメント」

ラッシュは，その初期の代表作『アメリカにおけるニュー・ラディカリズム――社会的一範型としての知識人』（1965）において，社会における批判的役割を知識人が担うことを知識人の「使命」として強調した。そしてそうした知識人観を，自らの言葉で「インテレクチュアリズム（intellectualism）」と呼び，生涯をとおしてそれに忠実であろうとした。この知識人の「使命」という考え方こそが，彼の研究を，そしてその延長線上にある彼の社会批評を大きく規定することとなった。

まず，ラッシュの知識人の定義を確認しておこう。ラッシュは，『ニュー・ラディカリズム』において「知識人」を以下のように定義している。

> 「知識人とは，大きくいえば，考えることが同時に彼らにとっての仕事と遊びという目的をも満たすような人物として定義されるかもしれない。より専門的にいえば，彼と社会との関係が，生産と権力という実際のビジネスの中に直接的に取り込まれることよりも，彼の目，社会の目のどちらから見てもディタッチメント（detachment）を維持しながら社会にコメントしうるその能力によって定義されるような人物である。彼の使命（vocation）が，もっとも一般的な意味では社会に対する批判者たらんとすることであるゆえに，そして彼の批評の価値が，現代的場面からある一定の距離をおいてディタッチメントを維持すること，そのことに依拠すると想定されるがゆえに，知識人たちにとって残りの社会との関係は，けっして全体的には心地のよいものではないのである。」[6)]

初期における以上のような定義が，その後の生涯をとおしてラッシュ自身がこだわりつづけた知識人像の基礎となった。ラッシュは，政治的，経済的生活のメインストリームから一定の距離をおき「ディタッチメント」を維持することによって社会において批判的役割を果たすことを，知識人の「使命」として捉えていた。ラ

ッシュが「ディタッチメント」に関して論じるなかで問題としているのは，知識人の制度的位置ではなく，そのパースペクティブである。ラッシュは，「ディタッチメント」について論及することで，ただ単に知識人たちにアメリカのメインストリームから一定の距離をとるよう提言しようとしたのではない。ラッシュにとって「ディタッチメント」とは，「無関心（indifference)」を意味する態度ではなく，また後で述べるような「離反（alienation)」といった態度と同じものでもない。むしろラッシュは，そこへの知識人の「関与（engagement)」の仕方について何らかのことを論じようとした。

1-2.「知識人のアンチ・インテレクチュアリズム」――「コミットメント」と「離反」

『ニュー・ラディカリズム』のなかで，ラッシュは，19世紀末から1960年代初頭にかけてのアメリカ・ラディカリズムをめぐる状況の変容との関連において知識人について考察している。この著作は，一方でその表題にもあるように，19世紀末以降，革新主義運動の高揚とともに台頭してきた新たなラディカリズムの形態を「ニュー・ラディカリズム」として，そしてジェーン・アダムスら革新主義的知識人や左翼知識人たちを「ニュー・ラディカル」として定義し，彼らの思想やその活動について個別的に見ていくことで彼らの実像に迫ろうとするものである。そして他方で，全体をとおして，その「使命」としての批判的役割を果たせずになにかしら生命力を失ってしまった彼ら「ニュー・ラディカル」たちに関する様々な警告的な事例を示すことで，批判的役割に関する何らかの描写を試みようとするものである。

ラッシュは，このような「ニュー･ラディカリズム」が台頭してくる契機として，いわゆる「革新主義時代」以降のリベラリズムとラディカリズム間の区別の曖昧化を挙げている。ラッシュによれば，第一次大戦以前のアメリカにおいて，「リベラルとラディカルとの間」の区別は知識人にとって非常に重要な意味をなしていた。しかしながらそれ以降，「心理学が政治への鍵となり，教育が社会変動への鍵とな」り，「文化的革命が社会革命と同じくらい重要な」ものとなっていくにつれて，アメリカのラディカルたちの関心は，19世紀ポピュリズムに代表されるような政治的闘争から，心理学，教育といった文化的なものへと向かい，そして「改革（reform）がラディカリズムから独立し」，リベラルとラディカルとの違いは見えにくくなっていった[7)]。そして，知識人たちにとって，政治的選択は，「リベラル」か「ラディカル」かではなく，「ますます『コミットメント（commitment)』と『離反（alienation)』間の選択となっていった」[8)]。

ラッシュにとって「ニュー・ラディカル」たちは，もはや「ラディカル」ではなかった。彼らがたとえ自らを「ラディカル」と標榜しようとも本来的意味での「ラディカル」ではもはやなく，彼らを一見「ラディカル」たらしめているのは「コミットメント」と「離反」間の選択に過ぎない，そうラッシュには思われたのである。この著作の最終章の表題は「知識人たちのアンチ・インテレクチュアリズム（anti-intellectualism of intellectuals)」である。この知識人たち（ニュー・ラディカルたち，そしてリベラル知識人たち）の「アンチ・インテレクチュアリズム」へと向かう潜在的可能性が，ラッシュにとっての批判すべき中心的関心であった。ラッシュは，先にあげた現代知識人の傾向

を示す「コミットメント」と「離反」という二つのキー概念に関する考察をとおして「アンチ・インテレクチュアリズム」に関する定義を試みている。そして，それに関する批判的考察をとおして「ディタッチメント」に関する，そして真の「インテレクチュアリズム（intellectualism）」に関する彼自身の見解を示そうとした。よって以下では，「コミットメント」と「離反」に関するラッシュの見解を整理し，その上で，ラッシュの「ディタッチメント」に関する見解について明らかにしたい。

「コミットメント」

アメリカのメインストリームから一定の距離をおき「ディタッチメント」を維持することにともなって，知識人たちに生ずるのは，人々に受けいれられることへの願望と，政治的拒絶やマージナリゼーションの恐怖であった。これらのような願望や恐怖に対する不安感によって，知識人たちは自らをメインストリームの際立った特徴である実用性を意識し，「現実的（realistic）」，「プラグマティック（pragmatic）」，そして一般的なものとして自らを提示しようとしてしまう。ラッシュが「コミットメント」として定義したのは，まさにこの傾向である。こうした傾向にあった当時のリベラル知識人たちは，タフ，現実主義的，そして実際的であるとの世評を獲得しようとして，まさに「ディタッチメント」という「インテレクチュアリズム」の本質を犠牲にしたのである。

> 「もし知識人たちがアイデアと戯れることから喜びとプロフィットを引き出す人々として定義されるならば，アカデミックな政治家やアカデミックな技術者たちは，まったくもってもはや知識人ではない。」[9]

『ニュー・ラディカリズム』において論じられているノーマン・メイラー，コロネル・ハウス，そしてリンカーン・コルコードのような独特の政治的リーダーや，政治運動に対してかなりコミットした「コミッティッド」知識人たちにおいては，知識人の「使命」に対する弊害は，「全能の幻想（illusion of omnipotence）」として定義されるような，政治権力や適合性への過度の没頭という形であらわれる。彼らの知的企図を政治家たちもしくは政治運動への一つのサービスとして定義することで，「コミッティッド」知識人たちは，批判的客観性にとって本質的であるようなある種の超然さを犠牲にしてしまったのである。ラッシュが述べているように，「権力の座にある人々への，もしくは抵抗運動へのアドバイザーとしての知識人という考えは魅惑的な罠である。知的誠実さは不可避的にこの種の結びつき（engagement）によって弱められてしまうために，この罠は絶えず阻止されなければならない」のである[10]。

ラッシュにおいてコロネル・ハウスのケースは，この罠の教訓的な事例となるものであった。ラッシュによれば，ハウスは，ウィルソン政府を戦争という帝国主義的な考えから引き離そうと試みていた。しかしながら「取引と妥協のもつれた網」[11]の中に引き込まれることで，ハウスは，「権力の座にある人々へのアドバイザー」という表面上の地位にとどまるために，結局は戦争遂行の立場へと自らの立場を無理からに変更したのである。このハウスのように主義を権力に従属させるか，はたまたハウスに友人であったリンカーン・コルコードのように主義に対する権力の裏切りに直面して敵意を持った疎外状態に甘んじるかという二者択一的な選択は，「コミッティッド」知識人たちがいつも直面し

なければならなかった選択―― FDR が1930年代後半に中道へと移行したときのニューディール・ラディカルたちも同様の状況下にいた――であった。ラッシュが論じるように，そのような環境のもとでは，知的「使命」の高潔さを維持することはほとんど不可能であった。

「離反」

その一方，意味ある文化的改革の中で果たしうる何らかの知的役割を全くもって否定するような「離反」は，「コミットメント」と同じくらい深刻に，「インテレクチュアリズム」にとって害となるものであった。ここでいう「離反」とは，民衆たちの希望なき反動もしくは中流知識人文化に幻滅し，意味あるコモン・ライフ批判を捨て去っていった左翼知識人の傾向を示すものである。『アメリカン・レフトの苦闘』（1969），『ナルシシズムの文化』，そして『ミニマルセルフ』（1983）といった著作[12)]に至って非常に辛辣なものとなるラッシュによるニュー・レフト批判，そしてまた，晩年期の『エリートの反逆』（1995）における左翼知識人批判[13)]は，彼が『ニュー・ラディカリズム』において用いた文化的ラディカリズムと政治的ラディカリズムの両者間の区別――それはすなわち「離反」と「インテレクチュアリズム」間の区別――が基礎となったものである。60年代における対抗文化的レフトたちは，『ニュー・ラディカリズム』における文化的ラディカルたちと同じように「離反」の餌食となった。「離反」的知識人たちは，精神の内面に焦点を当てることやイデオロギー的コミットメントを解明することで，「コミッティッド」の同僚たちに呼応してしまうことからはいくぶん逃れることが出来たかもしれない。しかしながら，公共的討論にとって特有で意味深いような何らかのものを供給するための能力――同市民たちの利益のために批判的に「ディタッチメント」を利用するその能力――は，「離反」的知識人たち自身のイデオロギーとともになくなってしまったのである。

1-3．「超然とした関与（ディタッチド・エンゲージメント）」

現代における「ニュー・ラディカル」たちは，ラッシュにとってただ単に「離反」を選択したことによって「ラディカル」の名を付与されたにすぎず，ラッシュからすれば「ラディカル」でもなんでもなかった。ラッシュは，「離反」の餌食となってしまった文化的ラディカルたちが普通の人々の関心や言語から自らを完全に切り離してしまう限り不可能であるような，別の種類の政治の可能性を探求し，そうすることでアメリカ・ラディカリズムを再生する活路を見出そうとした。ラッシュのいう「ディタッチメント」は，決してこのような「離反」という態度と同じものではない。ロバート・ウェストブルックによれば，それはいわば社会との「超然とした関与（detached engagement）」である[14)]。ラッシュは，知識人の批判的な企図を，可能な限り広範に市民階層と共鳴するような公共的議論や表現の形態として捉えていた。

「人民（people）」への妥当性や忠誠など何もないような文化的反乱においてその批判的エネルギーを浪費するような批評家や集団は，ラッシュにとってよくても彼の時間を浪費しつづけ，悪ければ途方もなく唯我独尊的な企図に参与しつづけるものにすぎなかった。さらにいえば，消費者文化が「離反」的知識人たちの文化的ラディカリズムを容易に吸収してしまった場合，その形態での抵抗は無意味なものとなって

いた。結局は，ラッシュからすれば大した有効性もなく唯我独尊的であるような文化的ラディカリズムにおいてそのエネルギーを浪費してしまった「離反」的ニューレフト・ラディカルたちの企図は，劇的な変化を生じさせるような要因としてはうまく機能しなかった。ラッシュは，たとえその生涯をとおして物質的にゆがめられようとも，また政治的に追放されようとも，決して「離反」となる誘惑に屈したりはしなかったラルフ・ボーン（『ニュー・ラディカリズム』における英雄の一人であった）に学びつつ[15]，現代の支配層たるエリートたちに対する真に有効な政治的な攻撃は，コンセンサス・リベラル派の「コミッティッド」知識人たちではなしえないような「超然とし（detached）」つつかつ「関与的（engaged）」であるような批判的態度や知的誠実さを要件とするようなものでなければならないと考えていた。ラッシュ自身，「ディタッチメント」と「関与」という両者を同時に知識人たちに求めるという自らのアドバイスが一見，矛盾的なものであるために，その意図が誤解されてしまう可能性をよく理解していた[16]。しかしながら，「超然とした関与」こそが，ラッシュにとって，社会における批判的役割というその「使命」を果たす上で欠くことのできない，知識人の取るべき態度であった。

ラッシュが『ニュー・ラディカリズム』において提示しようとした「インテレクチュアリズム」のビジョンは，知識人たちが「ディタッチメント」を常に意識し，彼ら自身が自らの批判的企図に関する明確な感覚をもっているために，「コミットメント」や「離反」に陥ることなく，批判すべき社会的現実との距離を容易に操れるような「インテレクチュアリズム」のビジョンである。そしてラッシュはその後の人生をとおしてこのような知識人の「使命」に関する理解を保持しつづけた。

2．歴史と社会批評

前章において明らかにしたような知識人の「使命」に関するラッシュ自らの考えを背景に，ラッシュは単なる歴史的記述というだけでなく，社会批評にも重きをおいた。ラッシュはなによりもまず，自ら知識人としてその批判的役割の重要性を意識し，その生涯をとおして常に知識人のあるべき姿を問いつづけるとともに，辛辣な社会批評を展開しつづけた。しかし，それと同時に，いやむしろそのために彼は自らが歴史家であるということにもこだわりつづけた。本章ではその両者の関係をラッシュがどのように捉えていたのかを見ていこう。

2-1．精神分析から歴史的記述へ

ラッシュは，70年代後半から80年代前半にかけて，有名な『ナルシシズムの文化』を中心に，フロイトやM. クラインらの精神分析理論に依拠しつつ「ナルシシズム」論を展開した。しかしラッシュはこれ以降，精神分析的社会批評から脱却し，より明示的に歴史的イディオムへと立ち戻りつつアメリカ的な「ポピュリズム」的社会批判を展開しようとした。この移行は，より具体的にいえば，マルクスやフロイトといったヨーロッパ人思想家との思想的結合の後の，ラルフ・ウォルド・エマソンやウィリアム・ジェイムズ，そしてラインホールド・ニーバーといったアメリカ人思想家たちへの，そして彼らの思想が土台となり，現代まで水面下で脈々と受け継がれてきた反リベラリズム的，反「進歩」的なアメリカ独特のラディカリズム思

想の伝統への回帰として捉えることが出来る。この回帰の背景には，一つには，ラッシュの「ナルシシズム」論における精神分析的視座からの議論に関する誤解という問題がある。ここではまず，この点について簡単に触れておきたい。

ラッシュの精神分析との出会いは，それまでの彼の思想を大きく転換させる契機となった。ラッシュは，その人間の「限界（limits)」に関する理解や歴史的感受性の中に，リベラリズムやマルクス主義のような物質主義的イデオロギーによっては答えられることなく残されてきたと彼が考えていたいくつかの問いに答える可能性を見出すとともに,「ナルシシズム」を主題とする独自の視座からリベラリズムやニュー・レフトに対する辛辣な批判を展開した。しかしラッシュは，彼の精神分析的著作に対する批判的反応と評価的反応の双方がしばしばともに，彼の議論を誤解し，もしくは，例えば厳密な意味での「ナルシシズム」概念の妥当性やその援用方法についてなどのラッシュにとっては間違いなく周辺的なものにすぎない議論を強調することで[17)]，彼が伝えたかった中心的なメッセージを結果的に喪失させてしまったと感じた。

フロイト理論がしばしば難解なものであったように，精神分析的批評には，容易には回避できない誤解の問題がつきまとう。ラッシュにとって，いかに精神分析的視座が思想としては批判的役割を果たす上で有用であったとしても，それが平素なスタイルでオーディエンスたちとコミュニケートすることを困難にするものであるならば，社会批評のイディオムとしては不十分なものであった。それゆえ，この誤解の問題が，ラッシュの社会批評を，マルクス主義者やフロイト主義者たちの批評によって用意された理論的で難解なイディオムから脱却し，そしてよりアメリカ人に親しみやすい政治的で歴史的な「ポピュリズム」的言説へと向かわせる一因となった。ただここで指摘しておかなければならないのは，確かに晩年期の「ポピュリズム」論において，フロイトやクラインといった精神分析理論家たちへの言及や「ナルシシズム」や「セルフフッド」等の精神分析的用語の援用はほとんどみられなくなるが，しかし,「ポピュリズム」論での根幹をなすラッシュのキリスト教的人間観や世界観をめぐる歴史的考察の土台となっているのは，まさに精神分析的視座から彼が捉えた人間観や世界観をめぐる理論枠組みであるということである。ラッシュは言葉の上では確かに精神分析を捨て去り,「預言者的伝統」と彼が呼ぶキリスト教的なアメリカ人思想家たちの伝統へと傾倒する。しかしそれは，ラッシュが，マルクスやフロイト，そしてクラインといった思想家たちから学んだのと同様のことを，アメリカ人思想家たちの中にも見出すことが出来ると考えるようになったからであり，その傾倒は，それに先行する彼らヨーロッパ人思想家たちとの思想的対話の延長線上のものなのである。

その一方で，ラッシュの歴史への，そしてアメリカ人思想家たちへの回帰の主たる動因となったのは，歴史と社会批評との関係についてのラッシュの探究である。ラッシュの社会批評は，冒頭で述べたように「社会批評としての歴史」である。歴史家であることと社会批評を展開すること，この二つの側面がラッシュの生涯をとおして常に意識されつづけ, そしてその交錯が，ニューディール進歩主義からマルクス主義，そして最終的に「ポピュリズム」へと至るレフトを大きく横断することとなったラッシュの移行の大きな一因ともなっている。

2-2．ラッシュとホフスタッター

ラッシュにおいて，歴史は，意味ある社会批評を展開する上で欠くことのできない要素として位置付けられていた。だからこそ，ラッシュはその生涯をとおして常に自分が歴史家であると自覚し，歴史的記述をとおして社会批評を展開することを重視する立場にこだわり続けたのである。このようなラッシュのスタンスに大きな影響を与えたのは，歴史学者リチャード・ホフスタッターであった。ラッシュは，コロンビア大学大学院に在学中，短い期間ではあったがホフスタッターの研究助手を努めたことがある。しかし，在学中にホフスタッターから頻繁に指導を受けていたわけではない。にもかかわらず，二人は友人となり，互いの原稿のやり取りや出版社の紹介など，公私にわたって生涯をつうじてその関係をつづけた。

ラッシュに対するホフスタッターの影響は大きく，そして複雑なものであった。ホフスタッターは，ルイス・ハーツやダニエル・ブーアスティンらとともに，アメリカの政治的伝統の思想的同質性と保守性を強調するアメリカ史解釈を柱とする「コンセンサス学派」あるいは「新保守主義学派」と呼ばれる潮流に位置付けられる人物である。「コンセンサス学派」あるいは「新保守主義学派」のアメリカ史解釈は，民主的改革に抵抗する保守勢力とそれを推進する革新勢力との対立を軸としてアメリカ史を捉える「革新主義学派」の歴史解釈を修正ないしは破壊する傾向を示した。しかしながら彼らの取り組みは，必ずしもそのことを意図したものであったわけではなく，むしろ50年代におけるマッカーシズムの盛り上がりや対外政策におけるイデオロギー的硬直性といった問題の解明に向けて，意味あるアメリカ史像を探求しようという学問的関心に導かれてのものであった。事実，ホフスタッターは，政治的には決して保守派ではなくリベラル左派というべき立場に位置していた。ラッシュにとってホフスタッターは，リベラリズムの内在的批判者として捉えられ，そういった意味でラッシュは彼から大きな影響を受けた。ラッシュは以下のように述べている。

> 「彼（ホフスタッター〔引用者補〕は，多くの点で私の知的地平において非常に大きな影響力をもつ人物であったし，あり続けた。彼の研究は，ほとんどのアメリカ人歴史家たちの出発点であり，私にとっても実りの多いものである一つの伝統，革新主義の伝統（progressive tradition）とのリエンゲージメントのよいお手本であった。」[18]

ラッシュは，リベラル派の新聞社の編集者，記者であった父リチャードの影響のもと，中西部の革新主義的リベラリズムへのシンパシーとともに育った。後にラッシュはリベラリズムに対する批判的態度を強めていくことになるが，たとえそれが批判の対象であったとしても，常に「リベラルの伝統における価値あるものを評価してい」た[19]。『ニュー・ラディカリズム』における革新主義的知識人に関する批判的考察も，一方で彼らにおける「価値あるもの」を評価していたからこそのものであった。それゆえに，特に初期のラッシュにとって，リベラリズムの内在的批判者であったホフスタッターの存在は非常に大きなものであった。その一方で，ホフスタッターの研究は，大衆への蔑視とともに，ラッシュのまさに批判の対象であったリベラル・エリートたちに訴えかけるものであった。それゆえホフスタッターによって表現された世界観，アメリカの特徴に関する理解は，多くの点でラッシュのそれとは異なっており，彼

は多くの点でラッシュにとって批判の対象でありつづけた。ホフスタッターの存在は，ある意味，ラッシュの知的「他者」として意味をもっていた[20)]。とはいえ，ラッシュはホフスタッターの研究や彼との直接的な接触をとおして革新主義に関して多くのことを学んだ。

そしてまた，ホフスタッターは，親しみやすく，そして同時に現代社会に対する批判として妥当するような歴史的記述，つまり「社会批評としての歴史」のモデルをラッシュに与えた。ホフスタッターの歴史的記述に対するラッシュの賞賛は，最後まで変わることがなかった。ラッシュは以下のように述べている。

> 「人々は言う。『まあ，ホフスタッターが著したような一種の総合的歴史（synthetic history）を書くことはもはや不可能だろう。そのジャンルはそれに尽きる。われわれはあまりによく知っている。非常に特別な知識がそこにある。』…（中略）…ひとたび（ローレンス〔引用者補〕）グッドウィンを読めば，その読者はホフスタッターによるポピュリズムに関する説明を決して受け入れることはできないであろう。しかし（グッドウィンの著した〔引用者補〕）『民主主義の約束』は，その縮訳版でさえも，ホフスタッターが巧みにその影響を及ぼしたような読者たちまで届くような種類の本ではない。」[21)]

歴史を現在の政治問題に妥当なものとしようとするホフスタッターの著述スタイル，そして彼の研究に対する評価に接するうち，彼はラッシュにとって知識人のモデルとなっていった。そしてホフスタッターの歴史的社会批評は，ラッシュが自らの研究においてフォローしようとし続けたアメリカ社会との結びつき方や妥当性のモデルとなった。

2-3．歴史と社会批評

ホフスタッターの歴史的記述から強く影響を受けていたラッシュにおいて，歴史と社会批評の両者は切っても切れないものであると考えられていた。しかし同時に，ラッシュは両者の間には潜在的な分離があることも認識していた。実のところ社会批評は現代における妥当性をあまりに意識するがゆえに，しばしばまったくもって貧困な歴史理解に立脚したものとなりがちである。一方，歴史はしばしば，現代社会に対して適切な批評を展開しうるような余地を残さない「客観性」という基準に従わざるをえない。ラッシュは，こうした潜在的な分離の問題と取り組み，歴史と社会批評という二つの領域の関係性を相互関係的にとらえ，両者を独自の方法によって接合しようと試みた。

ラッシュは，何らかの批判的な知的企図においては，日常の問題に妥当させるように歴史を理解し，そしてその理解が基盤となった社会批評を展開することが重要であると考えていた。ラッシュによれば，歴史は「それが社会批評の形態として企図されるとき，しばしば最善のものとなる」。いいかえれば，社会批評は，現代に妥当するような形での歴史的記述を可能とするような道を提供する。つまり，「社会批評としての歴史」は現代社会に対して，単なる過去の記録以上の何かを，現代における批判的問いかけに対する答えを提供しうる，そうラッシュは考えたのである。しかし単に歴史が社会批評を必要とするだけではない。ラッシュは，歴史が現代社会への妥当性という試練に屈するのと同じように，実際に社会批評もまた，歴史的基礎知識という試練に屈しがちであると感じていた。ラッシュは以下のように述べている。

「過去においては，科学主義こそがまさに，歴史家たちにとっておそらくは現在におけるより以上に大きな誘惑であったと私は考えている。しかし今日においては，私は，危険なのは狭い党派的コミットメントが歴史家の記述や思考の様式に影響を与えることではないか，そう考えている。私は，歴史はしばしばそれが社会批評の形態をとって企図されるとき最善のものとなると考えているが，しかし私は，社会批評という名のもとで現れる多くの素材をてばなしで評価したりはしない。社会批評とイデオロギーとの間には相違があるのである。」[22)]

ラッシュにおいて，社会批評とイデオロギーとの間の相違は，彼が社会批評にとって必要であると考える歴史理解のあり方の有無に関わっており，そしてそれはしばしば後者においては全体的に欠如していると考えられた。言い換えれば，社会批評は，歴史が自らを現代の日常的な事項に真に妥当するものとするために社会批評を必要としたのと同じように，自らを狭く党派的なもの以上の何かにするために誠実な歴史的研究を必要とする，そうラッシュは考えたのである。

ラッシュは，歴史と社会批評との相互依存的関係に着目し，自らの知識人観に由来するその批判的役割を果たす方途，つまり「インテレクチュアリズム」を可能とする方途を，「社会批評としての歴史」として自らの社会批評を展開することで見出そうとしたのである。

3．「社会批評としての歴史」と『唯一の本当の天国』

3-1．「過去の同時代性」と歴史家の「責務」

前章において明らかにしたように，ラッシュは，歴史と社会批評との関係性を重視し，歴史と社会批評はお互いがお互いを必要とすると理解していた。しかしながらこれら両者の接合はしばしば失敗するのだということを絶えず意識しながら社会批評を展開していった。そしてラッシュは，自らの社会批評において，狭いイデオロギー的「コミットメント」によってもたらされる罠を，すでに研究された図式や事象からある程度距離をとりつつ，過去に関与することを試みることで回避しようとした。ラッシュは以下のように述べている。

「私は完全に距離をおいているという意味において歴史は常に科学的でありうるという考えは退ける…（略）…私は依然として，ある種のディタッチメント（detachment）は，最も強度な種類の関与（engagement）と共存すべきであると考えている。」

このようにラッシュは歴史的記述における科学主義を退ける一方で，その歴史への関与の仕方について続けて次のように述べている。

「その種の批判的ディタッチメント――それはつまり，自らのアイデアや立場を，あるものが他のものへと適用する同様の基準や同様の懐疑主義を提起する意志である――を維持しえなければ，（一方で〔引用者補〕）過去の人々について，現在における政治的正しさに関する非常に狭い基準であるようなもの，また何が文明的であり進歩的であるかに関する非常に狭い基準であるとわかるようなものによって考えてしまうような，しばしば過去に対する独特の恩着せがましい態度（condescension）を引き起こしてしまうし，また（他方で〔引用者補〕）過去の人々を冷徹に批評したり，でなければ結局のところ彼らは過去に生きていたのであって，それ以上にはなにも知らなかったのだという根拠で彼らを大目にみるようになるであろう。一方でのこの種の態度と，他方での（過去の人々に対する〔引用者補〕）性急な批評や高慢な批評はともに，よき歴史的記述にとって等しく破壊的である」[23)]。

実際にラッシュ自身，こうした態度や批評と必ずしも無縁であったわけではない。その典型的な例が，「ポピュリズム」論において特に重要な社会批評家・思想家として取り上げられているエマソンやニーバーに関するラッシュの解釈である。彼らは，それ以前のラッシュにおいてそれほど評価されていたわけではなく，特にエマソンに至っては「ばかげた楽観主義者」としてむしろ批判的に捉えられていた[24]。それは，彼自身の認めるところであるが，ラッシュ自身が彼らを位置付ける既存の図式にとらわれてしまっていたためである。

そういったことを回避するために，ラッシュが歴史を扱ううえでの基準としようとしたのが，「過去の同時代性（contemporaneity of the past）」である。これは，現代における歴史家独自の問題関心と過去の社会批評家，思想家たちの問題関心との共有性を歴史理解の基準としようとするものであるが，しかしラッシュは「過去の同時代性」を基準とすることで，単に彼らの叡智から現代を批判するための何らかのことを学び，そしてそれを基礎知識として自らの批判に活用しようとしたわけではない。ラッシュは以下のように述べている。

「歴史的研究は，まるで自らが，すでにこの世にいない人々と会話において結びついているかのように進めなければならない。まるで彼らが実際に現在に生きているかのように。彼らは同時代人として扱われなければならないし，そしてそうすることで彼らは尊敬されなければならない。（現代における〔引用者補〕会話のなかに組み込まれる必要のある声（voices）を有している人々として。私にはそう思われる。そして，歴史家は，もちろん無視されがちな彼らの声のゆえにではあるが，見失われた人々，歴史の敗者の側にいる人々に対して特有の責務（obligation）を有している，私はそう考えている。」[25]

「見失われた人々，歴史の敗者の側にいる人々」は，たとえ彼らの知性に現代に対する批判者としての潜在的可能性が眠っていようとも，一方であくまで過去の人々として科学主義的に解釈される限り，他方で既存の解釈図式のもとで取り扱われる限り，「見失われた人々，歴史の敗者の側にいる人々」にすぎない。ラッシュは，「過去の同時代性」という基準の下，現代における歴史家独自の想像力に満ちた批判的視座から彼らに再び光を当て，再解釈することをとおして，彼らを過ぎ去りし日の「敗者」としてではなく，より積極的に，まさに「現在に生きている」「同時代人」として，現代における社会問題に対して妥当する批判者としてよみがえらせようとした。ラッシュが歴史家のなすべきこととして考えていたのは，過去の人々に関する歴史家独自の解釈を提示することにとどまらない。むしろそれよりも力点をおいていたのは，現代に対する批判者としての彼らの潜在的可能性を見出すことで，読み手がより直接的に過去の人々とあたかも「同時代」に生きているかのように「会話」できるようにすることであり，「過去の同時代性」とはそのための基準なのである。

そして重要なのが，このような取り組みを歴史家の「責務」としてラッシュが考えていたことである。それが歴史家の「責務」であるのは，逆にいえば，それが歴史家にしかなしえない企図であるとラッシュが考えていたことを示している。ラッシュにおいて歴史家は，まさにこのようなラディカルな「責務」を負った存在として特別な意味をこめて考えられており，この点に，歴史家という職業が，社会における批判的

役割という知識人の「使命」に対して果たしうる貢献についてのラッシュの深い敬意の念を伺うことができる。「社会批評としての歴史」は，この歴史家の「責務」という考えを背景とした企図なのである。

3-2.『唯一の本当の天国』

歴史家の「責務」を果たすための試みは，「社会批評としての歴史」の集大成的作品ともいえる晩年期の著作『唯一の本当の天国』において「ポピュリズム」論という形で具体化された。彼の数多くの著作の中でももっとも歴史的であると同時にもっともアメリカ的な批評の作品であるこの著作において，ラッシュは，「進歩」に対する独自の批判的視座から，「見失われた人々，歴史の敗者の側にいる人々」の思想の再解釈に取り組んでいる。ここでは，この『唯一の本当の天国』を題材に，「社会批評としての歴史」の方法論的思想について具体的に見ていきたい。

まずは簡単にその概要について述べておこう。

この『唯一の本当の天国』は，一方での「進歩（progress）」批判として結実したリベラリズム批判と，他方での「希望」の再生というかたちで展開されるラディカリズム再生の探求という二つを軸とした著作である。この著作においてラッシュは，現代においても依然として根強い「進歩」幻想に対する信頼によって導かれる「希望」は，もはや「希望」ではなく「楽観主義（optimism）」と同様のものであり，現代社会は絶望と「楽観主義」の終わりなきサイクルの中にあるという理解のもと，そのサイクルを打破するために，「進歩」の対観念として「運命（fortune）」や「摂理（providence）」を挙げ，それら観念への信仰によって導き出される「より活力ある形態」での「希望」を提示しようと試みている。この「希望」は，ラッシュにおいて，「限界の認識（recognition of limits）」によって媒介された人間本性や歴史に関する理解をもとに引き出される精神状態である。ここでいう「限界」とは，事物の秩序における人間の力や自由の限界のことであるが，しかし，こうした秩序に対する人間の全面的な依存性や，逆に人間の「能力（competence）」を発揮する可能性の否定を意味するものでもない。それはまさに，両者間の緊張関係を弁証法的に媒介し，統一的な世界像の獲得を，そしてそれにともなう世界に対する「希望」という心的状態の喚起を可能とする認識である[26)]。

ラッシュがこの著においてまず取り組まなければならなかったのは，「希望」を「楽観主義」と同様のものたらしめ，現代における絶望と「楽観主義」とのサイクルを生み出したその背景を，「進歩」批判を柱として描き出すことであった。そして彼は，「進歩」の観念を軸として啓蒙主義から現代リベラリズムへといたる「リベラリズムの伝統」を構成した。そしてその上で，この「リベラリズムの伝統」に対抗するものとして，「進歩」に対する批判的態度を表してきた思想家たちの多種多様な知性や19世紀ポピュリズムをはじめとする様々な社会運動を「過去の同時代性」という観点から再解釈し，それらを「進歩」思想に対する一群の抵抗の伝統，つまり「ポピュリズムの伝統」として再構成している。

「ポピュリズムの伝統」としてラッシュが提示する思想家たちや社会運動は，彼がその伝統の主たる知的源泉であるとする共和主義的伝統[27)]をはじめとして，エマソンやジェイムズ，ニーバー，そしてマーティン・ルーサー・キングへ

と至るキリスト教的「預言者的伝統」，サンディカリズムのジョルジ・ソレル，ギルド社会主義のG.D.H.コール，19世紀ポピュリズム，そして公民権運動等々，実に多種多様である。ラッシュは，それに先行する研究，特に「ナルシシズム」論をとおして得た現代人観，世界観をめぐる独自の理論枠組みのもと，それらを大胆かつ想像力豊かに再解釈し，先にあげた「限界」を柱とした一つの反「進歩」的な思想の伝統として合成したのである[28]。

ラッシュが批判的な歴史的記述を企図する上で最も重視したのは，「ディタッチメント」によって可能となる，従来の図式にとらわれることのない歴史家自らの大胆な想像力である。このような「リベラリズムの伝統」対「ポピュリズムの伝統」といった一群の伝統間の対立図式を軸とする構想は，C.W.ミルズの「社会学的想像力」やその影響のもと考案されたロバート・ニスベットの「歴史社会学」の影響でもある[29]。このような大胆な構想は，一見するだけでは無節操ともとられかねないが，ラッシュは「過去の同時代性」という一つの基準のもとで判断材料を丁寧に検証していくことで，ある一定の説得力をもたせることに成功している。

この『唯一の本当の天国』においてラッシュが試みたのは，前章において指摘したようなアメリカの政治的伝統の思想的同質性を主張したホフスタッターらのアメリカ史像に対して異議を唱え，それにとらわれることなく，歴史家の「責務」として，現代における自らの独自の批判的視座から「見失われた人々，歴史の敗者の側にいる人々」の思想を想像力豊かに改めて再解釈し，それらを，まさにこれまで明示的には論じてはこられなかったような，アメリカにおいて水面下で脈々と受け継がれてきた自らも位置する一つの批判的な思想の伝統，つまり「ポピュリズムの伝統」として再構成することであった。前節においても指摘したが，この作業をとおしてラッシュは，エマソンやニーバーに関するそれまでの自らの見解を修正している。エマソンやニーバーに限らず，ラッシュは，「過去の同時代性」という基準の下，上記した思想家たちと改めて対話することをとおして，彼らの思想に潜在的に眠っていた，「進歩」思想や現代リベラリズムに対する批判者たる「ポピュリスト」としての要素を見出した。そうすることをとおして，ラッシュは，彼らの思想に眠る潜在的可能性を救い出し，彼らをまさに「同時代人」として現代によみがえらせようとしたのである。

しかし，この著作における試みは，単に「ポピュリズム」の知的源流をたどる思想史的企図ではない。「ポピュリスト」として描き出された過去の思想家たちは，「ポピュリズム」論において確かに重要な位置をしめてはいるけれども，しかし彼らはあくまでその伝統の一部に過ぎない。彼らに関するラッシュの論及は，過去の実際のポピュラー・ラディカリズムの盛衰の歴史や，それぞれの時代における文化的雰囲気と常に関連付けられて論じられている。そうすることでラッシュは，過去の思想家たちの独特の批判的視座を起点に，それぞれの時代に生きた「普通の人々（ordinary people）」のうちにあった批判的態度を，少なくともそのイメージを浮かび上がらせようとしたのである。ラッシュが「ポピュリズムの伝統」を再構成することで描き出そうとしたその伝統の真の主役たち，「英雄」たちは，過去の偉大な思想家たちであるよりもむしろ，まさにそういった「普通の人々」なのである。

3-3．「社会批評としての歴史」

「社会批評としての歴史」は，「完全に距離をお」く科学主義的な歴史的記述ではない。そしてまた，一方での歴史やその教訓を捨て去ろうとする「恩着せがましい態度」や他方での過去の人々に関する「性急な批評や高慢な批評」に基づく歴史的記述でもない。それは，「過去の同時代性」という基準のもと，過去の人々を彼らの現代に対する批判者としての潜在的可能性を見出す形で再解釈し，彼らを「同時代人」としてよみがえらせることで，読み手自身が過去の偉大な人々とより直接的に会話できるようにすることを目的とする歴史的記述である。

過去に関心をもつことで，ある者は今日的関心事との共有性やそれとの継続的な妥当性に敬意を抱く。そして，ひとたび読者たちが過去のアクターたちと共有する関心事や誤りがちなこと，そしてヒューマニティーを認識すれば，著者だけでなく読み手もまた，「恩着せがましい態度」や「性急な」もしくは「高慢な」歴史解釈を生じさせる衝動を免れることができる。現代の狭い党派的衝動を回避するようなフェアな方法で歴史をみることで，彼らは，意味あるものとして過去を理解し，現代において取り組むべき問題を解決するための先見的解答――もしくは少なくとも試みるためのカタログ――をその中から見出しうるようなある種の会話において過去とより直接的に結びつくことができる，そうラッシュは考えたのである。

『唯一本当の天国』の最後のところでラッシュは，「ポピュリズムの伝統は，近代世界を悩ませる病にとっての万能薬を提供するものではない。それは…（中略）…正当な問いを発するのである」と述べている[30)]。ラッシュにとって「社会批評としての歴史」という企図は，単なる出発点に過ぎない。ラッシュは，「ディタッチメント」であることによって得た想像力豊かな独自の視座から，「ポピュリズムの伝統」を構成したが，しかし彼は，そうすることで自らの主張や歴史理解を読み手に押し付けようとしたわけではない。そうではなく，彼が望んだのは，彼の著作の読み手たちひとりひとりが，現代における社会問題に関して過去の偉大なる思想家たちとより直接的に会話することをとおして，彼ら自身がアメリカにおいて水面下で受け継がれてきた抵抗の伝統に位置し，ラディカリズムの担い手たる「英雄」たちである可能性の感覚を彼らに与えることである。ラッシュにとって，それこそがまさに，ラディカリズム再生に向けた出発点なのである。

4．ラディカリズム再生に向けた歴史家の潜在的可能性

以上までの考察において，社会における批判的役割という知識人の「使命」を果たすべく，ラッシュが歴史家としてどのような方法論的視座のもと「社会批評としての歴史」という自らの企図を展開したのかについて論じてきた。本章では，ラッシュが生涯をとおして取り組んだ課題である現代アメリカにおけるポピュラー・ラディカリズムの再生[31)]に向けて，彼が歴史家として戦略的にどのような貢献ができると考えていたかについて見ていこう。

ラッシュは，自らが歴史家であることで，その再生に向けて大きな貢献が可能であると考えていた。ラディカリズム再生に向けた歴史家の潜在的可能性に関するラッシュの見解は，すでに1971年の『ニュー・アメリカ革命』への寄稿の中にうかがうことができる。

ラッシュによれば，成功裏に終わるような革命的変動の必要条件は，支配的文化と競争できるオルタナティヴ文化の創造である。不満を抱く学生や労働者，そして「ニュー・プロフェッショナル」たちは，新学生左翼とは違った方法で，過去からのより深いラディカルな文化的伝統にもとづく対抗的な文化を強調することによって共通の基盤を見出すことが出来る。ラッシュは，この伝統は，先進資本主義社会に置き去りにされたと感じている共通点のない諸集団すべてに共通な対抗的な文化を用意するに十分なほどの幅広さをもつものであると感じていた。意味あるラディカリズムの必要条件となりうるようなオルタナティヴ文化に関する定義において，ラッシュは，現代社会と効果的に結びついたラディカリズムを強調することと，不同意の政治の発展をそれと同じくらい強力に強調することとを結びつけて考察している。そういった文化を基盤とした政治は，学生や労働者，そしてニュー・プロフェッショナルたちにとって共通関心であるような論点を強調し，そしてそのことによって，階級や人種的境界に沿って引き裂かれつつある左翼本来の支持層の傾向を超克するのだと論じている[32]。

労働者階級や「ニュー・プロフェッショナル」たちに烙印を押すことよりもむしろ，ニューレフトは「環境の悪化や人民が消費者や市民としての能力において最も鋭く経験するような公共サービスの崩壊の責任は，黒人たちもしくは国家ではなく，企業や経済的，社会的統一体の境界線を引くことになった生産システムに求められなければならないということを例証しようと試み続けているべきである。窮乏や不安…（中略）…は，既存の生産システムから生じた労働者の領域や階級関係のなかにその起源を有しているということが明らかにされるべきなのである」[33]。ラッシュは，少なくともエリートによる抑圧という現代的状況下において共通性を見出しうるような，アメリカ人の大多数によって共有されている共通基盤（もちろんラッシュは，アメリカ人たちはそれ以上に多くのものを共有しているとも論じている）に関する刷新された感覚にもとづく政治の可能性を論じつづけていた[34]。その可能性が晩年に「ポピュリズム」という名のもとに語られることになる。ラッシュは「ポピュリズム」論において，現代アメリカ人の，彼の言葉でいえば「ナルシシズム」的人間のかかえるまさに「窮乏や不安」の源を，現代の生産システムやエリート－大衆的支配構造によって生み出された「隷属（slavery）」的状況に求め，それに対する批判的態度を軸としてポピュラー・ラディカリズムの可能性を展望すべきであると論じている[35]。まさにその晩年期の議論へと至る発想の萌芽が，すでにこの『ニュー・アメリカ革命』において見られるのである。

話を戻そう。歴史はすべてに開かれた革命的対抗文化の方途を用意するものであるとラッシュは感じていた。過去の成功裏に終わった革命前の対抗的文化のように，オルタナティヴ文化は，「支配階級」がそのインスピレーションを「徐々に見捨てていく渦中にあるようなより古い諸価値から引き出しうるものである」。そして続けてラッシュは以下のように論じている。

「我々の時代において，支配階級は，その自らの文化的伝統への最後の結びつき（last ties）を破壊し，過去の向こう見ずな軽視によって特徴付けられるような技術的なアンチ・カルチャーを社会に課した。新しいアンチ・カルチャーの手先たちは親しまれてきた伝統的規範を破壊し，全体的コミ

ュニティーを一掃し，そしてあらゆる形式の継続性を打ち壊すブルドーザーである…（中略）…『革命』とは今日において，他のことの中でも，人間の自然的な慣習それ自身を含む過去から保存する価値のあるものを保存しておくという唯一の希望をあらわすものかもしれない。」[36)]

ラッシュにおいて，歴史家は，過去の解釈者であり保護者であり，そして評価する人でもあった。そしてラッシュは，現代においては，歴史家こそまさに，エリートたちに対抗するための文化的基盤を養う上で不可欠な，現代における支配者たるエリートたちが捨て去っていった「人間の自然的な慣習それ自身を含む過去から保存する価値のあるもの」を救い出すことができる存在であると考えたのである。

ラッシュにとって知識人の役割は，社会運動において民衆たちに自らの世界観を押し付けるような形で指導的な役割を果たすのではない。そうではなく，まさにラッシュが19世紀ポピュリズムに見たように，民衆たち自らが自然に連帯していけるような批判的論点を提示する形でラディカリズムに貢献することであった。そして歴史家こそまさに，「人間の自然的な慣習それ自身を含む過去から保存する価値のあるもの」を守る方向で，批判的論点を提示することができる，そうラッシュは考えたのである。ラッシュは，歴史家を――そして歴史家である自らを――「進歩」という破壊的で過去否定的なイデオロギーへの本来的な反対者の役割から位置付けることで，知識人の「使命」を果たそうとしたのである。

むすびにかえて

以上までの考察をとおして明らかにしてきたことは，まず第一に，知識人はその「使命」として，アメリカのメイン・ストリームに対して一定の距離をおき「ディタッチメント」を維持し，「コミットメント」や「離反」といった状況に陥ることなく社会において批判的役割を果たしうる存在でなければならないとする知識人観をラッシュが有していたということである。第二に，現代社会おいて意味ある批判的役割を担うという知識人の「使命」を彼が常に意識し，自ら知識人としてその批判的役割を意味ある形で担っていくために，自らが歴史家としてあることにこだわりつづけたということである。そしてラッシュは，社会批評と歴史との相互依存的な関係性に着目し，両者の接合の可能性を模索する方向で自らの社会批評を進化させていったということである。第三に，問題関心の歴史的継続性，つまり「過去の同時代性」を自らの歴史理解の基準とすることで，ラッシュは，現代における狭くイデオロギー的な政治的基準にとらわれない，そして現代に対しても妥当するような批判的な歴史的記述，つまり「社会批評としての歴史」を展開しようとしたということである。その集大成的作品ともいえるのがその晩年の著作『唯一の本当の天国』であった。そして第四に，ラッシュにとって歴史家こそ，現代の支配者たるエリートたちが見捨てていった「価値あるもの」を過去から救い出し，まさにそれをエリートに対抗する広範な連帯を生み出すような批判的論点として提示しうる，ラディカリズム再生に向けたそういった潜在的可能性を有する存在であったということである。

ラッシュの晩年の「ポピュリズム」への積極的な言及は，彼がもっと以前から評価しつづけていた19世紀ポピュリズムに対するノスタルジックな態度の裏返しではない。実際のポピュ

リズム思想や運動は，確かに「ポピュリズム」論において重要であるが，しかし，それらはあくまでその伝統の一部に過ぎない。ラッシュにおいて，「ポピュリズム」という言葉には，その言葉が持つ一般的な意味以上の意味が付与されている。ラッシュは，その晩年に企図された批判的な歴史的記述，「ポピュリズム」論において，「ディタッチメント」を軸とした自らの知識人観を背景とした独自の方法論的視座のもと，「進歩」に対する抵抗の伝統，すなわち「ポピュリズムの伝統」を再構成した。その試みは，「価値あるもの」を過去から救い出し，まさにそれを現代の支配層たるエリートたちに対抗する広範な連帯を生み出すような批判的論点を提示するための試みであった。ラッシュにとって，そうした試みこそ歴史家として，知識人として自らが果たすべき「使命」であった。ラッシュにおいて，「ポピュリズム」という言葉には，彼の救い出そうとした「価値あるもの」が論点となることで，現代におけるポピュラー・ラディカリズムの再生に向けて「普通の人々」ひとりひとりが「英雄」として立ち上がることへの願いが込められているのである。

ラッシュの上述した知識人論やその後の社会批評的著作は，そこにみられる彼の徹底したリベラリズムに対する批判的態度のゆえに「アンチ・リベラリズム」的批評として評されることが多い[37]。しかしながら，ラッシュ自身のスタンスやその著作は，単に「アンチ・リベラリズム」というレッテルによって語り尽くせるものではない。第２章において指摘したように，もともとラッシュは，上述したように革新主義的リベラリズム，そしてリベラル知識人に対するシンパシーとともに育った。それゆえリベラリズムは，たとえそれが批判の対象であったとしても，「リベラルの伝統における価値あるものを評価してい」たラッシュにとって，批判する価値のある対象であった。ラッシュは以下のように述べている。

> 「リベラリズムの伝統は，寛大な種の政治に関する最良の希望を与えるものとして一時期，私には思われるものであった。そしてまさにその理由のために，リベラリズムは他の伝統よりもより価値のある結びつき（engagement）や批評として私の心を打った。」[38]

初期のころのラッシュにとって，リベラル知識人や左翼知識人に対する批判は，同時に，中流階級文化への蔑視とともにそこから逃避することで，その文化の有する諸価値やその文化と家族，近隣関係，そして宗教といったものとの関係を評価できず，訴える対象や批判すべき論点を見失ってしまった彼らに対する少なからずの期待を込めてのものであった。先にあげたホフスタッターもその一人であった。先に指摘したように，ホフスタッターの批判的な歴史的記述は，確かにラッシュの社会批評のモデルとなった。しかしラッシュにとって，ホフスタッターの言語や概念は，大衆に対する幻滅，そして蔑視に彩られ，エリートのオピニオンリーダー，経済的指導者，そして知識人たちからなるいわゆる「ニュー・クラス」たち――彼らはまさにラッシュが批判の対象としたものたちである――に直接訴えかけるものであった。初期ラッシュにおける知識人をめぐる考察は，まさに，最も身近なリベラル知識人ホフスタッターとの対決でもあった。

そしてラッシュ自らは，彼らに対する批判をとおして，自らの社会批評のあり方と常に格闘しつづけた。「社会批評としての歴史」は，ま

さにラッシュの生涯をとおしたこうした格闘のなかで形成されてきたのである。

注

1）　ラッシュの書評家としてのキャリアは，すでにコロンビア大学大学院在学中から始まっている。彼は，『ニューヨーク・ブック・オブ・レヴュー』や『ニューヨークタイムズ・ブックレヴュー』といった誌上において長年にわたって書評活動を展開している。

2）　C. Lasch, *The True and only Heaven: Progress and Its Critics*, W. W. Norton & Company, 1991.

3）　C. Lasch, *The Culture of Narcissism : American Life in An Age of Diminishing Expectations*, W. W. Norton & Company, 1979（石川弘義訳『ナルシシズムの時代』ナツメ社，1981）。

4）　B. Murchland, *Voice in American Education*, Prakken Publication, 1990, p.122.

5）　R. Jacoby, “Christopher Lasch（1932-1994）” *Telos*, 1995, p.122.

6）　C. Lasch, *New Radicalism in America（1889-1963）: The Intellectual as a Social Type*, A. A. Knopf, 1965, p.ix.

7）　ラッシュは，アメリカにおけるポピュラー・ラディカリズムの衰退の最大の要因として，このようなリベラルとラディカルたちの「融合」を挙げている。

8）　*Ibid*., pp. 286-287.

9）　*Ibid*., p. 317.

10）　*Ibid*., pp. 347-348.

11）　*Ibid*., p. 245.

12）　C. Lasch, *The Agony of the American Left*, A. A. Knopf, 1969, *Minimal Self : Psychic Survival in Troubled Times*, W. W. Norton & Company, 1984（石川弘義ほか共訳『ミニマル・セルフ――生きにくい時代の精神的サバイバル』時事通信社，1986，225頁）。

13）　C. Lasch, *The Revolt of the Elites and the betrayal of democracy*, W. W. Norton & Company, 1995（森下伸也訳『エリートの反逆』新曜社，1997，25-26頁）。

14）　R. B. Westbrook, “Christopher Lasch, *The New Radicalism*, and The Vocation of Intellectuals” Reviews in American History, Vo. 23, No. 1, 1995. を参照。

15）　C. Lasch, op., cit., 1965, pp. 69-103.

16）　R. B. Westbrook, op. cit., 1995, p. 187.

17）　そういった批判の一つとして，P.L.ワクテル『豊かさの貧困』土屋政雄訳，TBSブリタニカ，1985，257-280頁を参照。

18）　C. Blake and C. Phelps, “History as Social Criticism: Conversation with Christopher Lasch” *Journal of American History*, No. 80, 1994,

19）　*Ibid*., p. 1311.

20）　ラッシュの研究，そして社会批評における着想の多くは，ホフスタッターの思想と密接に，そして批判的に結びついている。ホフスタッターの『アメリカンライフにおけるアンチ・インテレクチュアリズム』や『アメリカ政治におけるパラノイド・スタイル』，そして『改革の時代』といった著作におけるメッセージの中に，ラッシュは自らの社会批評の出発点を，そして彼の19世紀ポピュリズムに関する考察へのラッシュの批判に典型的に現れているように，批判すべき多くのものを見出した。それゆえホフスタッターは，思想的にはラッシュにとって常に大きな，乗り越えるべき批判の対象でありつづけた。

21）　C. Blake and C. Phelps, *op. cit*., 1994, pp. 1318-1319. ラッシュの晩年期における「ポピュリズム」論は，グッドウィンによる19世紀ポピュリズムに関する再解釈の試みから大きな影響を受けたものである。グッドウィンの試みは，1950年代頃から大衆に対する幻滅とともにその暗い側面が注目され，否定的に取り扱われるようになっていた19世紀ポピュリズムの積極的な民主的側面に光を当てようとしたものである。そしてホフスタッターの19世紀ポピュリズム解釈は，その50年代の解釈を代表するものの一つである。この点については，R. Hofstader, *The Age of Reform : from Bryan to F.D.R.*, A.A.Knopf,1955（清水和久他訳『改革の時代～農

民神話からニューディールへ』みすず書房, 1988), および, L. Goodwin, *The Populist Moment: A Short History of Agrarian Revolt in America*, Oxford University Press, 1978を参照。

22) *Ibid*., p. 1329.

23) *Ibid*., pp.1329-1330.

24) C. Lasch, *op. cit*., 1991, p.546.

25) C. Blake and C. Phelps, *op. cit*., 1994, p.1330.

26) この点については，拙稿「C.ラッシュにおける『ポピュリズム』論の射程――「希望」と「限界」を中心とした理論枠組みについて」『立命館産業社会論集』立命館大学産業社会学会，第36巻第４号，2000年３月を参照。

27) ラッシュにおいて論及される「共和主義伝統」のモデルとなっているのは，G.ウッドやJ.G.Aポコックらによるアメリカ革命思想史に関する研究である（J.G.A.Pocock, The Machiavellian Moment: Floretine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition, Princeton University Press, 1975.)。

28) この点については，拙稿「『ナルシシズム』的人間と『希望』の再生――C.ラッシュにおけるラディカリズム再生の戦略」『立命館産業社会論集』立命館大学産業社会学会，第38巻第３号，2002年12月を参照。

29) ラッシュは，抵抗の伝統として「ポピュリズムの伝統」の他に，もう一つ，「コミュニタリアニズムの伝統」を挙げているのであるが，その伝統の核となっているのはニスベットのいう「社会学的伝統」である。この点に，ニスベットの影響を伺うことができる（C. Lasch, *op. cit*., 1991, pp. 120-167)。「社会学的伝統」については，R.ニスベット『社会学的発想の系譜』Ⅰ・Ⅱ，中久郎監訳，アカデミア出版会，1975，1977を参照。

30) C. Lasch, *op. cit*., 1991, p.532.

31) この点については，拙稿「C.ラッシュにおける『ポピュリズム』論の射程――「希望」と「限界」を中心とした理論枠組みについて」『立命館産業社会論集』立命館大学産業社会学会，第36巻第４号，2000年３月を参照。

32) C. Lasch, “Epilogue” *The New American Revolution*, R. Aya and N. Miller, editors, Free Press, 1971,p.331-332.

33) *Ibid*., p.332.

34) 付け加えていえば，ラッシュは，その約20年後､ラッシュの死後に出版されたその遺作『エリートの反逆』においても，アメリカ人がいかに多くの点で共通基盤を共有しているかを，そしてエリートたちがそのことを理解できていないかを論じている（C. Lasch, *op. cit*., 1995)。

35) この点については，拙稿（2002）を参照。

36) C. Lasch, *op. cit.*, 1971, pp. 333-334.

37) S. Holms, *The Anatomy of Antiliberalism*, Harvard University Press, 1993, pp. 122-140.

38) C. Blake and C. Phelps, *op. cit*., 1994, p. 1311.

Historian Christopher Lasch and Social Criticisms: the "Vocation" of an Intellectual and "History as Social Criticism"

CHIMORI Takao*

Abstract: Christopher Lasch, who wrote many books severely criticizing current American society and culture, was a well-known social critic in the U. S. and at the same time a trained historian. He noted correlations between social criticism and history, and thought that it was important for a social critic to have a profound understanding of history. His social criticisms were critical historical writings, so to speak "history as social criticism". True and Only Heaven is a compilation of all his critical historical writings. His critical stance was greatly influenced by his conception of the "vocation" of the intellectual, which is to be a critic of society maintaining "detachment" from the current scene. Lasch attempted to keep his "vocation" as a social critic by writing his social criticisms as "history as social criticism".

Keywords: intellectual, vocation of an intellectual, history as social criticism, contemporaneity of the past

* Graduate Student, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University